



尚絅学院大学のSDGsの取り組み

尚絅学院大学 副学長／教授／SDGs推進プロジェクト運営委員 赤坂 和昭
情報システムセンター長／教授／同運営委員 小池 敏英
高大接続推進部長／教授／同運営委員／同アクション委員長 渡邊 千恵子
政策企画室 地域実践グループ責任者／同アクション委員 佐藤 司

■尚絅学院大学の沿革と概要

尚絅学院は、1892年アメリカ合衆国のバプテスト派婦人外国伝道協会から派遣された女性宣教師たちによって、キリスト教教育のための「尚絅女学会」として創設され、1950年に短期大学を設置しました。4年制の大学としては、2003年に健康栄養学科・人間心理学科の2学科からなる尚絅学院大学総合人間科学部としてスタートを切り、2007年に表現文化学科・現代社会学科・生活環境学科を開設、その後2011年には子ども学科を加え1学部6学科の体制となりました。また、2007年には大学院総合人間科学研究科も設置しました。

校名となった「尚絅」は中国の「礼記」の編章である「中庸」の一節にある、「詩曰、衣錦尚絅、悪其文著也、故君子之道、闇然而日章、小人之道、的然而日亡」から選ばれたもので、その意味について簡野道明著「中庸解義」には「詩に曰く、錦の衣着ては、其の上に粗布の打掛を加えること。」とあります。また、後にミス・ブゼルによってこの校名に通じる建学の精神をあらわす聖句として、新約聖書ペトロの手紙第3章3節・4節が照引され選ばれています。

尚絅学院は、創設以来127年間にわたり創設者の宣教師たちの思いである、「キリスト教精神に基づく教育によって、自己を深め、他者と共に生きる人間を育てる」を尚絅学院の建学の精神として、一貫してキリスト教の精神を土台とする人間教育を行ってきました。

21世紀を迎えた現代の社会は、例えば超高齢社会、そこで不可欠な生涯学習、文化の国際化、世界各地で未だ絶えない紛争等、人間の営みに関する多くの課題があります。それを見れば、世代、性別、国境等の壁を超えて、人々が「共に生きる」道を尋ねる尚絅学院の建学の精神とその使命は、21世紀の社会においてますます重要な意味を持つてくると考えています。これまで本学は、尚絅学院の建学の精神をしっかりと受け継ぎ、「キリスト教精神と豊かな教養によって内面をはぐくみ、他者への愛と奉仕の心をもって社会に貢献する人間を育成する」ことを教育理念とし掲げた教育を実践してきました。

このような中で、2018年5月に、“Passion with Mission 熱い心、響かせる”をブランドステートメントとして掲げ、「各々の内面にある熱意を高め、実現する力を育成する」ため、学生と教職員が一つになって、次に示した3つの尚絅VISIONを追求することを宣言いたしました。

尚絅VISION

1. 心を響かせる：共感を熱意にし、自分を高める。目の前の人や地元をもっと元気にする。
2. 自信をみがく：小さな「面白い!」をつみ重ね、自信にする。学問と実践の接点を目いっぱい経験する。
3. キャンパスをひらく：多様な人々と率先して交わり、地域に貢献する。わざわざ来なくなる賑わいを創る。

本学では、この尚絅VISIONを基に、学生本位の教育の実現を目指し、2019年度よりこれまでの1学部6学科制から、人文社会学群（人文社会学類）、心理・教育学群（心理学類、子ども学類、学校教育学類）、健康栄養学群（健康栄養学類）の3学群5学類からなる学群・学系制としました。本学院の初代校長アニー・ブゼルの教育方針は、「時代を生き抜く力は、単なる物知りでなく、働ける人物即ち自己の生存する時代の要求に応ずることのできる者を養う。」というものであり、これは従来の知識の体系的な修得から、課題（他者）への貢献に焦点を当てた「時代の要求に応える力」を、一人ひとりの興味や関心に即して身につけさせるということです。学群制の導入により、教員が一つの学系に所属することで、学生の教育のニーズに応じて、必要とされる教育に当たることが可能となり、学生一人ひとりの学びの最適化により、世界や地域の現状に応じた分野

横断的な教育・研究を進めております。

また、市民の生涯学習講座やリカレント教育、企業との産学連携、学生の授業・課外活動など世代や立場を超えた交流の拠点として、2019年4月に東北最大の商業施設であるイオンモール名取3階あおばコートに「地域連携交流プラザ」をオープンし、社会との連携強化に向け、ハードとソフトの両面からの活動強化を目指しています。

■「尚絅学院大学×SDGs」～尚絅学院大学のSDGsへの取り組み～

持続可能な開発目標（SDGs）について、外務省のホームページでは、「SDGsは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。」と説明されています。そして、SDGsの17の達成すべき目標（ゴール）が、以下の様なアイコンとともに掲げられています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGsは決して国や政府、企業だけが意識すべき目標ではありません。貧困、飢餓、不平等、気候など世界共通の課題は、どこか遠くのことではなく、実は私たちの身近な社会に存在し、ひとつの専門領域、ひとりの専門家では解決できないことばかりです。一人ひとりが社会の担い手として、ジブンゴト化し、目標に向けて共に取り組むことが期待されています。そして今、大学には、これからの変化の激しい時代の要請に応え、社会の持続的発展に貢献していくことが求められています。実はそれは、尚絅学院が1892年の創立以来大切にしてきた理念でもあります。AI（人工知能）が極度に発達するとされる時代だからこそ、プゼルが強調した尚絅学院の教育の原点に立ち返り、Goodness —良い志—を持って時代を生き抜く総合的な人間力を育成することが求められています。この理念はSDGsに通じるものでもあると考えます。2019年度から始まった尚絅学院大学第4次中期計画“Mission19”では、これからの時代を生き抜く「実力」（陳腐化しない普遍的なスキル《コンピテンシー》、強みとなる専門分野と幅広い視野）を身につけ、建学の精神である「キリスト教の精神を土台として、自己を深め、他者と共に生きる」人間の育成、地域に寄り添い地域の力になる人材を養成する大学

として、さらにその使命を果たすため、3つの尚綱VISIONのもと、19の重点課題を掲げました。その根底には、グローバルな視点を持ちつつ、東北の諸課題の解決に焦点を当てた教育・研究を進め、SDGsの達成に向けて行動する「地球市民」を育てるとの想いを込めました。

本学のブランドコンセプトに基づくSDGsを意識した最初の取り組みとして、2018年10月にせんだいメディアテークにて「大学生と考えるSDGs～私たちのアクションプランづくり～」を開催しました。ここでは、学生・教職員に加え、学外の方も交え、SDGsの17ある目標の中の7つの目標についてそれぞれテーブルに分かれアクションプランづくりの後、その成果を発表・議論することにより、SDGsへの理解を深めとともに、積極的な取り組みを進めていくことを確認しました。このイベントを皮切りに、2019年には、“Mission19”の中にSDGsへの取り組み促進を盛り込むとともに、「尚綱SDGs Action」と銘打ってSDGsにかかわる本学主催の連続講演会等のイベントを展開しています（表）。その一つとして9月には、SDGsの日本語版の制作に携わられたことでも知られる、博報堂DYホールディングスの川廷昌弘氏を講師としてお迎えし公開講演会を開催し、一人ひとりのSDGsへの理解を深め、持続可能な社会の実現に向けた大学の果たす役割を一緒に考えました。

更に、SDGsの達成を目指す2030年までの10年間にわたり学生や地域社会とともにSDGsへの取り組みを積極的に推し進めて行くため、その中心的な役割を担う組織として「尚綱学院大学SDGs推進プロジェクト」を立ち上げました。

SDGsとして掲げられた目標は、私たちの身近な社会に存在する課題であり、これまで学生や地域の方々ともに行ってきた大学の多くの取り組みはSDGsと深く関連しています。その中から、今、尚綱学院・尚綱学院大学が取り組んでいる活動のいくつかについてご紹介いたします。

表 2019年度の主な「尚綱SDGs Action」イベント

2019/6/4	映画『血筋』上映会
6/23	今年のテーマは「SDGs」来て、見て、さわって、楽しめる 環境マルシェ
6/29	公開教育講演会 「東日本大震災と名取市の教育」
7/6	ドキュメンタリー映画上映会 「かすかな光へ」
7/9	Patagonia2019 Worn Wear College Tour トークイベント 「気候危機への取り組み～パタゴニアが考える企業と責任～」
9/18	2019年度全学FD研修会 「Mission19×SDGs～大学はSDGsとどう向き合うか～ SDGsで自分を変える、未来が変わる。」
10/26	教職課程センター 第2回公開教育講演会 「働きがいもあるライフスタイルを」
10/31	地域教育・研究センター 第1回公開講座 「東北から災害復興を考える：世界の災害から見た、大規模災害からの復興の課題と東日本大震災」
11/9	教職課程センター 第3回公開教育講演会 「私たちが考える男女共同参画社会」
11/18	第2回共生社会・キリスト教特別講演会 「豊かな性の多様性と人権」
11/20	地域教育・研究センター 第2回公開講座 「東北から災害復興を考える：現場報道が汲みとる被災者の思い～“個”を見つめる～」
11/23	地域教育・研究センター特別講演会 『川崎学「海を渡った仙台藩士 支倉六右衛門」』
11/30	第2回図工・美術セミナーin東北
12/1	第3回「スポーツ×栄養」公開講演会 「プロ野球現場における栄養・食事サポート」
12/21	映画「あの日のオルガン」上映会 & 丹野広子氏によるミニトーク
2020/2/8	教職課程センター 第4回公開教育講演会 「令和時代の教科書（仮題）」
2/26	第2回大学生と考えるSDGs～わたしたちのアクションプランづくり～

■SDGsの取り組みの実践紹介

1. 里山再生プロジェクト

1-1. プロジェクトの経緯

尚綱学院大学が所在する高館丘陵は、元々、地元住民が共同で管理し、木炭材の切出しや薪、キノコ、山菜の採集など、生活と密接に関わり大切に利用されてきました。1985年に開始された住宅地開発に際し、大学校地周辺の山林は緑地帯として保全する地域に指定されましたが、これまでの地域共同体としての管理はなくなり、里山としての組織的利用もなくなっています。

本学がこの地に移転してきた1989年当初、周辺にはカタクリ・日本スミレの群生や、数種のラン等の貴重植物が見られましたが、その後四半世紀を経過し、貴重植物は姿を消しつつあります。また、この地域は、安山岩が基盤岩層で、粘性のない薄いローム層が表層を形成しており、大木は生育しにくく、ある一定の大きさになると倒れやすい環境にあります。現在、既存の山道以外は、茨や下草が繁茂し中には入れない状態となっており、極めて通気性が悪く里山としての性格を失いつつあります。

2016年4月、その様な時に尚綱学院の周囲の約20万m²の山を地域社会全員の公共財とし、尚綱学院学院長を中心に里山「尚綱の森」として再生させるプロジェクトを立ち上げ、5か年計画で活動を推進しています。

この里山再生プロジェクトでは、「自然との共生」をキーワードとして、次のコンセプトを大切にしています。



安らぎの森	①下草を刈り、倒木を整理し、光と風が通る里山に再生します。 ②カタクリや日本スミレ等の群生を再生します。 ③以前は多く生息していた植物や昆虫の生息環境を整え、豊かな森に再生します。
学びと遊びの森	①学生・生徒・園児・市民が安全に自然に触れ合う里山「尚綱の森」を作ります。 ②里山を、学生・生徒・園児・市民の学びの場、遊びの場とします。 ③ボランティアによる里山再生を通して、環境問題に継続的に取り組みます。
光と風の森	①遊歩道や観察場を作り、季節を味わう多様な散策コースを作ります。 ②野鳥や昆虫を観察できる森にします。 ③多様な人々による里山づくりを推奨し、協働で森を管理し育てるシステムを構築します。

1-2. SDGsのゴールに向けて

里山再生プロジェクトは、尚綱学院・尚綱学院大学のSDGsの取り組みの柱の一つとして、次の6つの目標に向け活動しています。

目標4 質の高い教育をみんなに

関東以北に里山を持つ大学は本学院を置いて他にありません。整備にあたっては、行政、市民、専門家の手を借りてきました。学生・生徒・園児・市民の方々が自然と親しみ、環境教育の場として利用できる環境を整えていきます。

目標7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

現在、今後の展開の一つに、切った木や枝などを、バイオマスとして利活用していくことを考えていきます。学生が、「再生可能な、有機性資源の在り方」を考えていく際の、教材として利用していきます。

目標11 住み続けられるまちづくりを

住宅開発以前は、伐採されていましたが、現在、伐採はなくなり、樹木の倒木が多くなっています。このまま植生遷移に任せていけば、荒れ果てる環境になる可能性があります。住み続けられる街づくりへのアプローチの一つとして、里山の保全の大切さを提案していきます。

目標13 気候変動に具体的な対策を

尚綱学院大学の周囲の森は広く、里山再生を短期間で行える環境ではありません。年単位で整備できる規模を想定して5区画に分け、2016年度より5年周期で各区域を恒常的に整備いたします。

目標15 緑の豊かさを守ろう

「尚綱の森では、四季折々の豊かな植生と野鳥を観察することができます。穏やかな地形を利用した遊歩道や観察場を作り、緑の豊かさや季節を味わう散策コースを用意します。

目標17 パートナースHIPで目標を達成しよう

学内にNPO活動家や環境ボランティアに係る様々な市民を迎えて、市民参加型の里山創成を進めています。そうした方々と学院との交流を通して、学生・生徒の社会意識を高めるとともに、市民にとって尚綱を身近に感じ、尚綱の教育に参加いただける風土を育てます。

1-3. プロジェクトの現在の活動

里山プロジェクトは、NPOや市民ボランティア、地域住民、学生・生徒や教職員など、多様な方々の自由で自発的な活動により支えられています。毎月第二土曜日の定例活動では、倒木や茂ったつる草の除去、歩道の整備などの活動を行っています。毎回十数名が参加し、初めての方には専門家が道具の使い方から教えてくれるので、だれでも参加できる取り組みです。

この活動をベースとして、「里山トークイベント」など里山の歴史、保全・活用の在り方を考える講演会・講習会・ワークショップの開催、様々な里山の視察・交流による人づくりなどの活動を展開しています。この活動は、大学で学ぶ学生にとって、理論と実践をつなぎ、新たな課題を見つける場ともなっています。

今後は、切った木や枝などの利活用の在り方や、森を楽しめるような工夫を一緒に考えたりをしたり、ツリークライミングなどのアクティビティの実施を計画しており、森の楽しみ方を参加者で考え実施していくことだけでなく、この活動の影響を参加者の視点で観察し、さらには、里山整備が動植物に与える影響や森林微気象への影響についての学術的な調査研究も視野にした活動の展開を目指しています。

2. 大学祭におけるカーボン・オフセットの取り組み

大学祭の当事者である学生が大学祭における大量消費と大量廃棄に疑問を持つこと、少しのアイデアと配慮で環境負荷を抑えた大学祭になることに気づくこと、エコ大学祭を実現するために連携・協力することの楽しさを実感すること、これらを目的に、2013年より尚綱学院大学の大学祭である尚志祭におけるカーボン・オフセットの取り組みを始めました。この取り組みはSDGsが掲げられる前からスタートしたのですが、持続可能なまちづくり（適切な森林の整備・保全）、気候変動へのアクション、森林資源の適切な管理、行政・関係者とのパートナーシップの観点から、SDGsの目標「11：住み続けられるまちづくり」、「13：気候変動に具体的な対策を」、「15：陸の豊かさを守ろう」、「17：パートナーシップ」に深くかかわる取り組みとなっています。

2-1. 尚志祭におけるカーボン・オフセットの取り組みとは

本取り組みでは、大学祭期間中に排出される廃棄物、使用電力、出店で使用するプロパンガス、パンフレットを対象に二酸化炭素排出量を算定し、その内の1t分を登米市市有林間伐促進森林吸収プロジェクトのJ-VER（クレジット）を購入し、カーボン・オフセットを行っています。

具体的な活動内容としては、尚志祭期間中、通常のゴミ箱は撤去し、来場者はエコステーションに不要物を持参する方式をとっています。そのため、来場者用エコステーションは遠くからでも目立ち、分別しやすい工夫をするとともに、常に担当者が声かけを行うようにしています。出店者用のエコステーションでは、分別を

細分化することによって、自分たちが排出する廃棄物に関心を持ってもらうように工夫しました。

2013年度から取り組んでいます。毎年、新しいことを取り入れることをモットーとしており、2013年度は廃棄物、電力、プロパンガス、水をカーボン・オフセットの対象としましたが、2014年度にはパンフレットを対象に加えました。2015年度には非木材紙製のエコトレーを導入。カーボン・オフセットの説明は2013年度から継続して行っています。また、当初、本取り組みを主導したのは環境活動サークルFROGSでしたが、2016年以降、尚志祭実行委員会との協働が進み、2018年度には、尚志祭実行委員会が大学祭に不可欠な取り組みとして実施しています。



大学祭エコステーション

2-2. 取り組みの効果

エコステーションでは、廃棄物の整理や計量、運搬など、大変な仕事が多くあります。開始当初は、分別に懐疑的な学生たちも多く、出された袋の中を確認するということが少なくありませんでした。しかし、2年を経過する頃には、次第に分別することが当たり前の行動に変化していったことは、取り組みの成果といえるでしょう。

同時に、エコステーションやカーボン・オフセットの取り組みを「しなくてはいけないこと」ではなく、「楽しんでできること」に変える仕組みとして、エコステーションのデザインやクレジット購入代金の捻出のための古本市や古着屋の企画・運営、森林見学などを行ってきました。

この取り組みは、尚志祭実行委員会と環境活動サークルFROGSが中心になって行ってきましたが、学生生活課、出店団体、清掃委託会社といった学内の関係部署との連携だけでなく、東北経済産業局、クラウンパッケージ株式会社（エコトレー）など、行政や企業との関係も取り組み実施には大きな役割を果たしています。学生たちは、ひとつの活動を実行する際に、多様な関係者が関わっていること、サポートがあることを実感することができました。



大学祭ゴミ軽量

2-3. 社会からの評価

大学祭のカーボン・オフセットの取り組みは、これまでに「第4回カーボン・オフセット大賞（2014年）」の奨励賞（東北工業大学との合同受賞）、「低炭素杯2017」の優良賞、「東北地域カーボン・オフセットグランプリ（平成30年度）」の東北地域カーボン・オフセットチャレンジ部門チャレンジ賞を受賞してきました。これらの受賞を機に、学内での脱炭素社会への実現に向けた機運を高めていくとともに、東北地区の大学や中学・高校においても、広くカーボン・オフセットの考えと活動が広まるよう努めてまいります。

3. 産学官連携事業「もう蜜プロジェクト」

2018年より尚綱学院大学と名取市内の企業、高校、行政が協働してアイスの商品開発に取り組み、2019年7月より「もう蜜 ずんだチーズケーキ味」として販売するに至りました。その開発の経緯とSDGsとの関連についてご紹介します。

3-1. 「もう蜜プロジェクト」の経緯

「もう蜜」の企画は、名取市内に事務所を構える図南商事株式会社の運営するジェラートショップ Natu-Lino (ナチュリノ) が、被災地支援の取り組みとして同市内に立地し津波被害を受けた宮城県農業高等学校の農業経営者クラブの生徒たちとともにアイスの共同開発に取り組んだことに端を発しています。宮城県農業高校は、津波で学校自体が流され、その際、飼育していた牛も一緒に流されました。その中で、一頭の牛が奇跡的に生還し、「奇跡の牛」と呼ばれました。現在、同校ではこの「奇跡の牛」の子孫を飼育しており、その牛のミルクを利用し、同じく津波被害を受けた名取市北釜地区で栽培された菜の花の蜂蜜を使った「もう蜜」が第一弾のアイスとして生み出されました。

そして、「もう蜜プロジェクト」の第二弾の商品開発の企画が持ち上がり、尚綱学院大学も産学官連携事業の一員として企画への参画することとなり、名取市と名取市に所在する企業、高校、大学間のパートナーシップによる取り組みがスタートすることとなりました。

3-2. 「もう蜜プロジェクト」の取り組み

第二弾の「もう蜜プロジェクト」に、尚綱学院大学で食のプロフェッショナルを目指す健康栄養学科から片山ゼミの学生の他、学内サークル「Food for me for you」からも学生が参加することになりました。「Food for me for you」は“食事を通し人々との交流を図ることを目的に活動する”サークルで、これまで学科・学年を超えた人々のつながりの場の提供を目指した料理教室の企画・運営や、「今できることプロジェクト×栗原市」、「伊達な地にぎり合戦 秋の陣in愛媛宇和島」などで食にかかわる様々な活動を展開してきたサークルです。

プロジェクトは、2018年4月から、ジェラートショップNatu-Lino (ナチュリノ) が中心となり、月に一度のペースで商品開発会議が行われました。会議では、初めに事業の目標として、①宮城県を代表するアイスを作る、②ずんだの素晴らしさを伝えるアイスを作る、③大手スーパーマーケットやコンビニエンスストアに卸せるレベルのアイスを作るという3つを掲げられました。それを基に、約1年かけて、商品のコンセプト、商品開発のための専門家を招いた勉強会から、商品の試作・改良、商品のネーミングやパッケージデザイン、販売の戦略など多方面にわたる検討が行われました。その中で、宮城農業高校の生徒や尚綱学院大学の学生が、商品開発・生産・流通の現場について学ぶとともに、学校の授業や実習などで学んだ知識や生徒・学生の若い感覚に基づく様々な意見が出され、活発な議論がなされました。そして、2019年3月に「もう蜜 ずんだチーズケーキ味」が完成し、尚綱学院大学にて名取市長にも参加をいただき、完成試食会を開催することができました。

この商品開発の産学官連携事業を通し、①栄養価の高い地元食材を用いた食品の提供によるSDGsの目標「3：すべての人に健康と福祉を」、②高校生や大学生の実践教育の場としての「4：質の高い教育をみんなに」、③被災した土地・地域で生産した農畜産物の6次産業化による「8：働きがいも経済成長も」および「9：産業と技術革新の基盤をつくろう」、④その結果として「11：住み続けられるまちづくりを」、⑤生産・製造者と生徒・学生が共に議論した「12：つくる責任つかう責任」、そして⑥津波で被災した土地で生産を



続けることによる「15：陸の豊かさを守ろう」などSDGsのさまざまな目標と関わりを持つことができました。そして、「17. パートナリーシップで目標を達成しよう」の精神の大切さを、実践を通して学ぶことができました。

3-3. 「もう蜜プロジェクト」のこれから

「もう蜜 ずんだチーズケーキ味」は、全国各地で開催された「アイスクリーム万博」通称「あいぱく®」（一般社団法人アイスマニア協会主催）に出展し、各地で好評を得ることができました。そして、2019年11月から宮城県内全域で販売が開始されて、最初に掲げた事業の目標を達成することができました。現在、販売促進の活動と共に、第三弾の商品開発も次の学年の生徒や学生に引き継がれてスタートしており、さらに活動の輪を広げてゆきたいと考えています。

■むすび

尚綱学院大学は『SDGsの理念に賛同し、グローバルな視点を持ちつつ、東北の諸課題の解決に焦点を当てた教育研究、その他の活動を広く社会と連携して推進するとともに、これらを通じて、SDGsの達成に向けて行動する「地球市民」を育て、もって持続可能な地域社会の構築に貢献すること』を目指し、「尚綱学院大学SDGs推進プロジェクト」を立ち上げました。このプロジェクトを通し、本学のSDGsへの取り組みを積極的に公開し、地域社会、行政、産業界、教育機関の皆様と情報を共有しつつ、ともに持続可能な社会の構築に取り組んでいきたいと考えています。



キャンパス全景

■尚綱学院大学SDGs推進プロジェクト

〒981-1295 宮城県名取市ゆりが丘4丁目10番1号

Tel : 022-381-3475 Fax : 022-381-3417 E-mail : sdgs@shokei.ac.jp

尚綱学院大学×SDGsホームページ : <http://www.shokei.jp/sdgs/>